

バダ イン ジャ ラン

巴丹吉林沙漠で見つけた青い鳥

三輪 茂雄

(大学工学部教授)

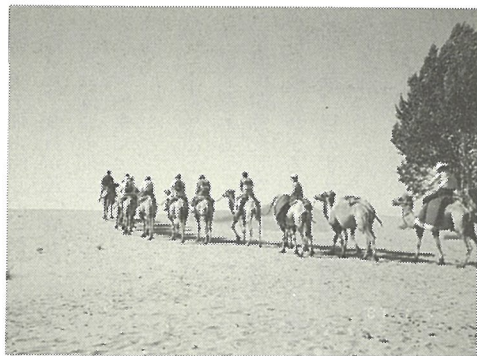
巴丹吉林沙漠は意外にご存じない方が多い。片仮名の書き方もさまざまなのでモンゴル人の発音を確かめてバダインジャランにした。内蒙古のゴビ沙漠の西南にある中国第三番目に大きい沙漠である。この南側をかすめるように西安、蘭州、武威、嘉峪関、敦煌、ウルムチとつづくシルクロードが通っている。ここへ行こうと決まるまでにはいろいろな経過があった。私は一九九一年に初めて中国を訪問して蘭州沙漠研究所の案内で鳴沙の名所を四箇所訪ねたが、満足できなかった。文献から知っている音のイメージとはまるで遠い。アメリカのネバダ州にあるサンドマウンテンはデューンバギーの遊び場になって現地管理局もお手上げ、アフリカはビザが出ない危険地帯。私にとって本物のプーミングサンドは夢だった。昨年一月に島根の仁摩町で世界鳴き砂シンポジウムがあり、それに参加した中国の蘭州沙漠研究所の陳、屈両氏が、帰りの電車のなかで、巴丹吉林沙漠の地図をとりだし、ここは軍事基地があつて前人未踏だ。最近ドイツの調査隊が入つたがどうも鳴沙があるらしい。「行こうよ」という。

だが、らしいでは頼りない。何か確かな証拠はと詰め寄つたら予備調査したところ敦煌より少し音が大きいという。うそかも知れない。現地はすこい所で砂の蟻地獄に落ち込んで遭難するかも知れない。そんな不安をいだいたまま網野町の鳴き砂を守る会をさそつてみた(島根県の仁摩町は乗らなかつた)。「鳴き砂を訪ねる旅はチルチルミチルの青い鳥探してみたいだが、同行しませんか」。「金は京都府と町を守る会で負担して息子どもに行かせる。」「するい。親父がゆくべきだ。」「もう若い者の時代だから。」「漁師の息子を沙漠につれて行くのか。」「海の鳴き砂も沙漠のプーミングサンドも生まれは違うが同じ石英で、同じ性質だ。規模の違いだけだ。海の鳴き砂もでかい山に積めばプーミングサンドになる。」「

こうして網野町を乗せたものの心配は増すばかり。実のところリックに青い鳥の鳥籠をぶらさげて関空に集合したとき気は重かつた。同志社卒の三浦、尾崎、米沢三君の応援もあつてチルチルの夢を乗せて離陸した。蘭州についた調査第一日目の朝はなんと雨天。がっかりしてとにかくテルテル

坊主を、リックにつけた。蘭州から武威へは海拔三千メートルの山越の道路を蘭州沙漠研究所の大型乗用車でゆく。頂上付近で万里の長城の西の端（残骸）か走っていた。千五百メートルくらいまでおりたところが武威。ここまでの景色は山が蛍光を帯びた緑の薄化粧、畑は豊かな麦秋と美しい。この日は沙漠の気配が濃厚な金昌泊。第二日目は九時出発一二時に中間拠点の雅布頓鎮着。ここの政府招待所につくと歓迎の横断幕があり、下にはモンゴル娘が盃をささげてやってきた。「これがここの歓迎だからとにかく飲むのだ」という通訳におそろおそろ舌をついたら猛烈な強い酒に私はむせてしまった。真夏というのに気温は二八度と快適な気候。とても沙漠にいるとは思えない。明日からの現地は水も風呂もない。公衆シャワーの特別サービスで明日にそなえる。

第三日目は最大の難関の強行軍だからと五時起きで六時に食料などを満載した太いタイヤの沙漠専用トラックとジープに分乗して鶏の声に送られて出発。次第に沙漠が迫ってくる気配がして、ついに前方には沙漠の山々が百八十度に展開する場所が駱駝に乗り換える地点だった。二〇頭の駱駝は野生で、必要なときに集めてくるという。全員はじめての駱駝乗りだが、モンゴル人に要領を開くと意外に簡単にのれた。しかし観光用ではないから鞍は単純なもので、猛烈に尻が痛い。若い駱駝だからときおりヤンチャもやる。全行程は精々数キロの距離だが、砂の山また山を越えてゆくから、しっかり駱駝につかまっていないと、落駝



さてこれかららくだの旅

してしまふ。途中で沙漠車が先行して待っていた。尻の痛さに耐えかねて私は沙漠車に乗り換えた。若いものたちは駱駝。だが車に乗って後悔した。こちらも楽ではない。ドライバーは沙漠のエキスパートだが、蟻地獄の穴のような砂の窪みに乗りこむときが恐怖の一瞬。横転寸前になる。ジェットコースターもどきのスリル満点である。前のジープがスリッパで動かなくなると沙漠車が救助する。それでもだめなら沙漠の草を引き抜いて敷く。なんどもこれでおしまいかという思いと、尻の痛さと比べながら、また周りの風景のすばらしさもかいま見ながら、無我夢中で一三時によく目的地につくことができた。かなり遅れて駱駝隊が到着。

「ボジトレガノール」

巴丹吉林は「水と草のあるところ」の意味という。ベースキャンは敦煌の月牙泉に似た湖のあるオアシスで、ボジトレガノールとは、モンゴル娘によるとこの湖の名前で、灰山湖の意という。目の前の砂山を第一地点と呼ぶことにした。すこし日差しが弱まった一五時に、第一地点でプーミン

ボジレガノール付近の調査地点

- ① 第一地点
- ② 第二地点
- ③ 第三地点



グテスト実施。プーミングテストというのは中国では鳴沙活動といい、人が砂の斜面に腰掛けた姿勢で手足を動かすと斜面の砂が流れはじめる。しばらくするとプーンと大きな音を発することという。表層雪崩と同じで、安息角の斜面を板状の砂の層が重力流動するとき百ヘルツくらいの低周波の音を発する。高さ約五〇メートルのところから一四人が横に並んで同時に降りることになった。私はカメラマンと録音班とともに麓で観測することにした。麓の標高一三



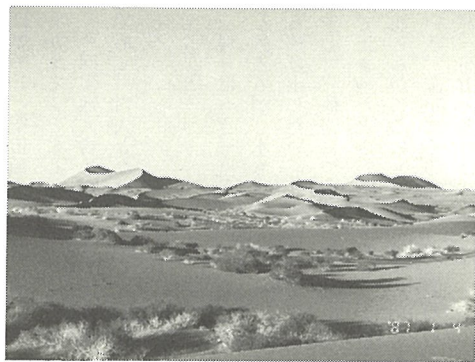
第一地点前に立つ
モンゴル娘

九〇メートル。「スタート」。今回の訪問の成否を問う一瞬だ。約数メートル降りた頃からプーンという音が発生。まるでプロペラ機が空を飛ぶ感じで、信じられないような音量だ。全員が麓に降りるまで音は続いた。実は録音の邪魔にならないよう、声を出さない約束だったので、終了するや堰を切ったように「すごい。やった。これだこれだ」。全員感激して叫んだ。

実験が終わるころからあやしくなっていた空模様が急変した。雷と砂嵐だ。沙漠の雷は危険きわまる。とにかく宿泊地に退避。猛烈な風。目のまえの砂山の頂上では飛砂が底を作っていた。砂山はこうして形成され、常に洗われているのだ。その夜は枯れ木を集めたたき火を囲んで現地人と酒盛り。モンゴル娘の踊と歌。それにお返しを

網野の若衆が受け持つ。その最中卒業生の米沢君が「プーミングだ。」と叫ぶ。たしかに「プーン」とどこからともなく聞こえて来る。全員で確認し、沙漠研究所の屈さんもちしかにあれだという。その夜は天には天の川が滝のようにながれ、星はいまにもこぼれ落ちそう。そこへしばしば鳴沙音。これこそ文献でだけ知っていた鳴沙の自鳴だ。風が強い日には砂が流れて音を出す。文献では自鳴は極めて稀な現象で年に何回かとあつたし、アメリカのNASAのクリスウェル氏も極めて長い間現地に滞在しなにかぎり自鳴には出会えないといったが、ここでは日常茶飯事なのだ。現地人は「あたりまえだ。砂山は鳴くものだともっていた」という。この返事は二〇年前に網野の琴引浜現地で聞いた話とまったく同じだ。(天の橋立までわざわざ出かけて確認して鳴かない砂もあることを知ったという。)本物の鳴沙自鳴の音を聞きたいという十数年来の念願が、叶えた喜びと安堵にひたりながら、これは夢かとも思ったりしているうち、いつか夢路についていた。

【第一地点】



朝のバルハンは絶景

八月三日。朝方の気温は一九度と寒く最高の避暑地である。朝日のバルハンの山容は絶景。昨夜のブーミングは西側に見える大きな砂山かららしいと出かけた。この第二地点でも約五〇メートルの高さから降下。昨日よりもさらに大きい音。昨日の実験で、麓まで一気に降りるのはシンドイから、途中で休むことになった。人はストツプしても砂は長い間斜面を滑り落ちるの、鐘の余韻のように継続する。その継続

時間は二分間くらいだったろうか。発生音は麓で聞いているとリンと張りつめた天空が響きわたるとでも形容できる共鳴音である。流動に関与する砂の量は活動する人数に比例するので大勢ほど大きな音が出る。一人でもおよそ数百キロ位の砂が動けば十分大きな音が出そうだ。昨夜の自鳴はこれだったにちがいない。

帰路駱駝の骸骨や石器のナイフ発見。さすが前人未踏の地だ。昼間は暑いので、行動はひかえる。熱沙の沙漠のわずかの木陰だがこの涼さは格別で昼寝。夕方若手グループだけで第三地点調査。第二地点より音は低いが景色は抜群と報告あり。その間尾崎君が英語のわかるモンゴル娘から砂の音について聞いた。風が吹くと砂は雷か飛行機のような音がする。それはこわいと思う。父は不思議なことだと言っていた。人がたくさん来てくれるのはうれしいが、この音がしなくなるのは淋しいことだともいった。この夜も食事はカップヌードル、固いパン、ミックスお粥缶詰。湖水は飲めない。水は購入した砂糖入りの水しか飲めない。顔を洗うも口をそそぐもペットボトル

でもってきた水のみ。その夜現地人たちは夜中から羊料理で飲み食い大騒ぎ。そのあと大風でテントが飛びそうになり眠れぬ夜だった。沙漠現地三日目。成果は十分なので予定を切り上げ今日引き揚げと決定したがさて現代人遺跡問題発生。昨夜の風でビニールなどが百メートルの範囲に散乱している。ここに来た文明人はわれわれしかない。将来ここを訪問する考古学者は必ず発見できる現代遺跡を一夜にして作ってしまった。証拠隠滅作戦である。たばこの吸い殻、ガラスびんの蓋、ペットボトル、ビニール袋など。全員で集めたが砂に深く埋まったものがたくさんある。現代人がたった二泊三日でこれほどゴミを出すとは、おどろきだった。現地人はゴミは砂に埋めるものだという認識がある。たしかに汚物ならいざれ風化するが、文明の利器は風化しない。私がガラス片を拾っていたら現地人は手で砂に穴を掘りながら、ここに捨てろという。折角集めてあったゴミもいつのまにか現地人が砂に埋めている。再び発掘作業をするのを不思議そうに眺める現地人。とりあえず燃えるペットボトルやビニール

は燃やし、空缶類やガラスは車に積んで持ちかえることにした。

今回現地人を含めて二〇人たらずでこの様である。百人となれば砂のトイレも満杯であらう。

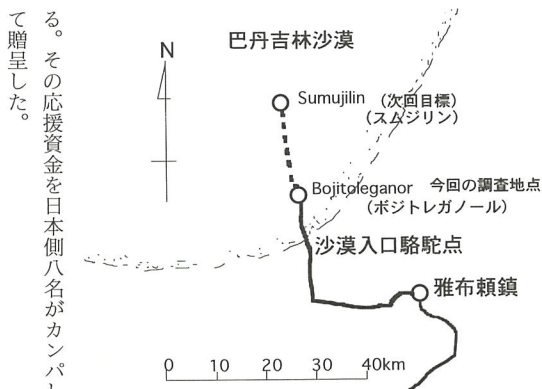
「帰路」

帰路にもう一度あの恐怖と痛みかと思うと滅入るが、水も食物もままならぬ生活から逃げ出したい、とにかく風呂に入りたたい一心で、帰路についた。帰り道でスリップで止まったとき、トイレにいった網野の三浦さんがここにも完全に鳴く砂山があるという。確かにその通り。名前がないから網野三浦山と名付けた。

基地、雅布頼鎮に帰着しシャワーと洗濯をしてやっと現実にもどった気持ちだった。一日早く引き揚げたから、ここで滞在するしかない。昼間はデータ整理そして夕方この町の主要産業、塩工場見学。地面を掘り起こせば塩の結晶がでる。ここで塩の大きな真っ白な山の安息角をみると一瞬みなのはってブーミングしたい気持ちになった。夜は町の運動会か舞踏会があるというので出かけると、貴賓席が用意されてい

て主催者に紹介された。この地に来る外国人は少ないから珍しいのだ。網野の若衆はいつのまにか町の子供や若者に溶け込んでいた。軍人さんも参加しほとんど町総出で、というくらいひたひただった。

翌日はアラ善右旗泊。ここは表敬訪問。人民政府招待所で羊の丸焼で歓待という。午後一時くらいから食事の支度ははじまる。羊をやるところを、見ないかとさそわれたが、遠慮した。夕刻に駱駝の毛の精製工場見学にでかけた。ここで巴丹吉林沙漠はモンゴル人と駱駝の共生の地であることを知った。駱駝の推定生息数は三万頭。一頭から三〜五キロの毛がとれるという。さてこの調査の総括として、この沙漠保存の道を提言する必要がある。雅布頼鎮滞在中に粗案ができたので夜、沙漠研究所の部屋を突然訪問して粗案の説明実施。これは、明日への下心あつてのことだった。翌日蘭州空港近くの食堂で、保護のための提言を逐条説明し納得を得た。これを骨子に来年北京で開催される地質学の世界環境シンポジウムで蘭州沙漠研究所が巴丹吉林沙漠のブーミングサンド保護について発表す



る。その応援資金を日本側八名がカンパしで贈呈した。

「帰国して」

当初、沙漠研究所はボジトレガノールを第一目標、さらに足をのばして奥地のスムジリンを第二目標にしていたが、日程の関係で第一目標だけになった。さらに奥地までは難路の続きが二〇キロちかくある。かなりの難航が予想される。沙漠研究所の調査では湖の数も多く、風光明媚この上なし

という。

山のあなたの　なお遠く

青い鳥が住むという

そこにラマ教のお寺もあると。

「どうでした」と聞かれると「とにかくすごかった」としかこたえられない。あまりに感動が大きすぎて正確に表現できない。テレビで放映しても伝えられない部分は多分体感や空気や巨大感そして駱駝の体臭かも知れない。

研究室の顕微鏡で粒子を眺めて私は息をつまらせた。砂粒が光り輝いている。この輝きはさきに敦煌の砂を長い時間洗ったあとでやっと見たものだ。今にして思えば前を走るジープが砂煙を出していなかった。砂埃などない桃源郷だったのだとあらためて砂をみつめた。

以下は私の独り言。「ところで青い鳥の鳥籠は？」「現地は当分安心だから鳥は放してきた。日本では自前のブーミングサウンドを作ろうよ。水族館もコンピュータのなかにつくる時代だ。」

同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄滴の啓明館(旧図書館)、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴染み親しんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しております。

○重要建築物シリーズ

○新島襄の面影シリーズ

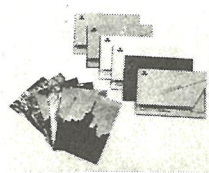
○大学今出川校地シリーズ

○大学田辺校地シリーズ

○女子大学今出川校地シリーズ

○女子大学田辺校地シリーズ

定価各シリーズ六枚一組二百五十円



●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

発行 同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)―二五―三〇三七―八